

# 長野県埋蔵文化財ニュース

No.39

1994.3.31

(財)長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4

TEL 0262-93-5926



1974(昭49)年の松本市弘法山古墳の発掘調査以来久しぶりの未盗掘の前方後円墳という点で県内に大きな話題をよんだ。

◀石室と遺物出土状況

▼内行花文鏡出土状況



## 長野市和田東山3号墳の調査

明治大学考古学研究室

和田東山古墳群は、長野市若穂保科上和田東山に所在する。古墳群は善光寺平東部に位置し、保科扇状地を一望する丘陵上に立地する。和田東山古墳群のすぐ西隣りには4世紀後半から5世紀後半にかけて築造されたと考えられる大星山古墳群が存在し、さらに西の山をひとつ越えたところには積石塚で有名な大室古墳群が展開している。また和田東山古墳群の東側の眼下には積石塚の長原古墳群が存在している。以上のような当地域の古墳の分布の中にあって、和田東山古墳群は、善光寺平における古墳築造の初期的なものであり、加えて、ひとつの丘陵上に前方後円墳3基、円墳2基、合計5基の古墳が存在する点で注目されるものである。

われわれの調査はこの和田東山古墳群の中でも中心的年代を示すものと測量調査の結果判明した第3号墳に対して行われた。1993年度で第2次調査を終えたが、これまでに未盗掘の前期古墳のデータとして以下のような興味深い事実が知られるようになった。

古墳の墳丘は、全長約46m、後円部径22.8mの前方後円墳と確認された。墳丘斜面には裾部から斜面のな

かほどまでに堅固な石積みめぐらされていることが分かった。ただし、古墳の東側斜面に設定したトレンチではこの石積みが検出されておらず、また後円部にたてられたと思われる埴輪の破片も、その出土は西側に偏在していて東側では全く出土していないことを考え合わせると、3号墳は西側の集落を意識してつくられているのかもしれない。

古墳の埋葬主体は、後円部中心に存在し、古墳の主軸と軸を一致させていた。埋葬主体は堅穴式石室(あるいは石槨)である。墳頂下約1.5mに存在するこの石室は、墳丘の盛り土を完了させた後に、あらためて墓壙を穿ち、地山まで掘り込んだ部分に底面をつくり、そこに石室を構築したものであった。石室の内法は長さ約5.5m、北小口の幅約1.4m、南小口の幅約1.1mである。天井石は架構しておらず、おそらく木棺を安置したのち板材等で石室を塞ぎ、土砂をもって墓壙を埋めもどしたものであったのだろう。

墓壙の埋土には、今回の調査において注目すべき事実が判明した。それは、石室の内法に対(次頁下段へ)

県埋文センターだより

# 平成5年度の事業概要

本年度も相変わらず調査に追いかけられた一年であったが、以下簡単にその概要を報告したい。※

## 1 発掘調査

オリンピック開催に対応すべく、特に今年も東・北信地区を主に発掘調査が展開された。

発掘調査面積合計 264,325㎡(延404,505㎡)

### ①上信越自動車道関係

佐久市芝宮遺跡他34遺跡219,750㎡(延345,000㎡)

### ②北陸新幹線関係

長野市篠ノ井遺跡他17遺跡42,310㎡(延56,785㎡)

### ③上記①②側道関係

芝宮245㎡、長野市浅川扇状地遺跡群・同三才遺跡910㎡(延1,365㎡)

### ④県道小布施村山停車場線関係

小布施町飯田古屋敷遺跡他1遺跡1,110㎡

## 2 試掘関係

### ①上信越自動車道関係

信濃町貫ノ木遺跡他6遺跡、対象面積67,510㎡のうち7,324㎡を実施

## 3 整理作業

### ①報告書の刊行(□内は報告書ナンバー)

中央自動車道関係東筑摩郡坂井村・麻績村 15

〃 〃 更埴市その1・長野市その1 16

〃 〃 長野市その2 17

県道中野豊野バイパス、志賀有料道路関係 19

主要地方道長野大町線関係 18

### ②整理作業・保存処理など

平成4年度まで調査した長野市石川条里遺跡他20

遺跡の整理作業、平成5年度分の調査記録等の冬期間整理及び石川条里等から出土した遺物の保存処理作業。

## 4 普及・公開・指導活動

①市町村との派遣協力—長野市へ1名(5・8・27～5・12・26) 中野市から2名(5・4・1～6・3・31)

②市町村への技術指導—松本市他9市・5町・7村 25件、延28名

③現地説明会—17遺跡延12回、参加者合計2,068名

④速報展—「解き明かされる善光寺平の歴史」(長野市立博物館 6・2・5～13、1,518名)、「遺跡からのメッセージ」(佐久創造館、6・2・19～27 2,487名)、「発掘調査速報展」(上田市立信濃国分寺資料館 6・2・24～3・1、594名)、「遺跡調査発表会」(中野市中央公民館、6・3・27、163名)

### ⑤講演会等への講師派遣

上田市立国分寺資料館他11件 15名

### ⑥刊行物(報告書以外)

「年報10」・「埋蔵文化財ニュース38・39」

## 5 職員の研修

①奈文研研修—5件 5名

②関係学会・研究会等への参加—7件 10名

③県外研究所・大学への資料調査—22名

④海外研修—中国へ4名

⑤研修会—大学教授等による現地指導・研修会など 県下市町村埋文担当者技術研修会(次頁参照)

⑥姉妹校研修—9回、41名

⑦県教育・産業教育両センター研修 17講座、18名

⑧全国埋文法人連絡協議会等研修 9回 30名

※(詳細は「年報」10を参照)

〈和田東山3号墳のつづき〉応するように、墳頂から細長いV字形溝を穿ち、黒色土を入れ、器台等の土器類を破碎したかたちで埋めているものであった。埋葬終了時あるいはその後の儀礼もしくは祭祀の痕跡として重要な資料といえるだろう。

石室内の副葬品は次のようなものであった(出土分布図は5頁)。鏡1、鉄刀1、鉄剣1、鉄槍3、鉈2、鉄斧2、鉄鏃19、砥石1、ガラス小玉40、管玉8。このうち鏡は倭製の内行花文鏡であり、面径約11・2cmである。副葬品の品目を検討すると前期古墳の副葬品として基本的なものを備えており、未盗掘の前期古墳における副葬品のセットとして貴重な資料を得ることができたわけである。

和田東山3号墳の調査も1993年度で2回目の夏を迎えた。2次にわたる調査の結果、得られた情報の大要は以上に記した。調査によって判明した多くの事実がある反面、依然として解決しきれない問題もある。ひとつは墳形である。3号墳が前方後円墳であるかどうか、前方後方墳の可能性はないのか、次年度の調査で解決を目指さなければならない課題である。また埴輪の破片がこれまでに多数出土しているが、この中に基部の破片はない。埴輪の樹立が、どこにどのような形でなされているのか今後追及しなければならない。また、墓壇埋土の黒色土中から出土した土器群の帰属する時期も、その型式学的な検討を通して解決を図らなければならない問題である。

文化課だより

## 平成5年度市町村埋蔵文化財担当者発掘調査技術研修会

3回目を迎えた市町村埋蔵文化財担当者発掘調査技術研修会は、平成6年1月26日・27日の2日間、長野市篠ノ井の(財)県埋蔵文化財センターと篠ノ井農協会館を会場に開催された。

本年度は、「発掘調査報告書の作成」をテーマに事例報告と講演による研修を行い、希望者には「発泡ウレタンによる遺物取り上げ実習」を実施した。46市町村・1町村会と県埋文センターから合計152名が出席、実習には38名が参加した。

第1日と2日目前半は、県内の3市町と県埋文センターから報告書の作成について事例報告がされた。

始めに、「松本市における発掘調査報告書作成の実情と課題」と題して竹原孝氏の報告があった。毎年7～8遺跡以上の調査を実施しているが、報告書は調査年度か次年度には確実に刊行するという方針を基本姿勢にしていること。そのため、担当者が現場に出ても整理作業ができるよう、遺物の洗浄から図版作成までをある程度マニュアル化し、作業が進行するような組織構成をとっていることなどが報告された。

続いて、御代田町教育委員会の堤隆氏からは、「ホークショ、シェイプアップ作戦」と題した報告があった。情報の洪水の中で、情報量だけが多い報告書を作るのではなく、利用者の使いやすさと、何を報告するかという報告者の考え方のうえにたって報告書作りをしていること。さらに一般市民向けと速報性を加味した概報作りをしていることも報告された。また、日頃氏が報告書作りに携わる中で得られた、報告書作りのハウツーも披露された。

更埴市教育委員会の矢島宏雄氏からは「『史跡森將軍塚古墳』について」と題して報告があった。調査報告については、年度ごとに概報を刊行し調査成果をいち早く公開してきたこと。本報告書の執筆については、事実報告を正確に行うということを基本に、調査にかかわった複数の報告書作成委員が執筆したこと。また、整備事業報告については、次に古墳の整備事業をする人達に、どんな考え方で、どんなふうに森將軍塚古墳を整備したのかが伝えられるようにという事を想定しながら作ったという話も聞けた。

県埋文センターの原明芳氏からは、「埋文センター長野調査事務所の報告書作成について」と題し、今後予定されている竪穴式住居跡3,600軒以上、その他の

遺構も多数検出され遺物もテン箱で約40,000箱という膨大な資料をどのように整理し報告書にまとめて行くのか苦慮しながら報告書刊行計画を検討しているという報告があった。

2日目は、文化庁記念物課松村恵司文化財調査官から「発掘調査報告書をめぐる諸問題」の講演をいただいた。まず、現在全国で年間に1,100億円の経費を費やして8,500件の発掘調査が行われ、約2,500冊の報告書が刊行されている現実について話された。そのうえで、報告書には具体的な基準や在り方論はないが、それは報告書の在り方そのものが、発掘調査の内容に規定され、また、調査によって報告書の内容も規定されるからだとされた。また、報告書に求められる速報性と、発掘調査を体験するに足る事実報告と調査者の考察、考古学以外の各方面から求められる様々なニーズに対する認識の必要性についても注意を喚起された。さらに、報告書の具体的な作り方にも言及され、報告書の体裁や、ページ数、図版や文章の記述について、また、報告書における写真の重要性も強調された。

研修全体をとおして、「県内市町村の報告書作りに対する課題や工夫、また、全国的な視野に立った報告書の現状や問題点、展望等が聞け大変有意義であった」等の感想が多くよせられた。

2日目の講演の後、場所をセンターに移し「発泡ウレタンによる遺物の取り上げ」実習が行われた。埋文センターの白沢勝彦調査研究員の指導によって進められ、参加者の中には初めて薬品を取り扱う人も多かったが、薬品の反応の具合を確かめながら実習が進められ、「これで脆弱遺物の取り上げに自信がついた」との声が参加者の間から聞こえ、好評であった。

この研修会は、研修の機会の少ない県内市町村の埋蔵文化財担当職員に対し、(財)長野県埋蔵文化財センターと県教育委員会が共催して、発掘調査技術の向上を目指して実施されてきた。平成3年度の第1回目は「発掘調査測量法」「水田址調査法」「遺物保存処理法」。第2回目の平成4年度は、「試掘調査の考え方とその方法」「中世城館跡調査の成果と発掘調査の方法」をテーマにして研修を実施した。来年度以降もこの趣旨に沿って、より質の高い発掘調査を目指し、担当職員のニーズにあった研修を実施していきたいと考えている。

## 平成5年度長野県下発掘調査の主な話題から

本年度も相変わらず発掘調査関係のニュースが多く報じられたが、主要なものを簡単に振りかえてみたい。論文、報告書などについては省略する(註)。

### 〔旧石器時代〕

北信野尻湖周辺に話題が集中した。すでに延2万人近い参加者を集めた恒例の野尻湖遺跡発掘も今年は第12次を迎え、解体痕あるナウマン象の骨片や多数の遺物が出土した。地元に着した全国に例のないその独特な調査方式にそろそろ大きな成果が期待できよう。

この湖底調査に呼応するかのように、湖周辺の調査に本年度は大きなニュースが相ついで報じられた。信越自動車道やそれに伴う町関係の緊急発掘である。

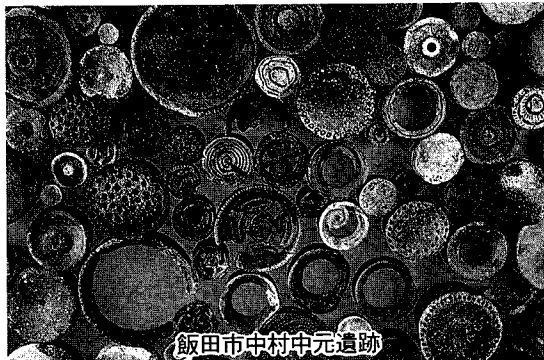
まず最初は、磨製石斧40本出土という驚くべき発見となった日向林B遺跡(本誌前号)では、研磨用砥石を伴う数ヶ所の環状ブロックが確認され、次年度の全貌解明が待たれている。また東裏遺跡では東日本では珍しい「剝片尖頭器」が話題となった。4本の自然流路中からは約5千点の石器が出土し、神子柴型石斧などもある。次年度本格的調査に入る貫ノ木遺跡でも礫群や炭集中とともに多数の石器が出土し、予想外の内容豊富な大遺跡であることが判明した。また町教委による上ノ原遺跡では、わずか700m<sup>2</sup>ほどの範囲から記録した石器だけでも約3000点という密集した出土状況が露呈され、その内容も杉久保系ナイフを中心とするが尖頭器も少なからず伴出し、両者の関係究明に新しい課題を提供した。

この他では、諏訪市ジャコッパラ遺跡の長さ23cmと

17cmの長大な粘板岩製の石斧の出土、茅野市夕立遺跡での上の原同様1万点以上の石器多出も、黒曜石原産地との関連で注目された。



茅野市立石遺跡



飯田市中村中元遺跡

なお調査以外では、佐久考古学会が主催した矢出川遺跡発見40周年記念のシンポ「細石器文化研究の新たな展開」は、地元野辺山に多数の参加者が集い、漁撈問題など多角的討議が展開された。大会決議となった矢出川遺跡の国史跡指定へのアピールも、その後関係機関の尽力で遅きに失した感はあるものの、近々実施される見通しが得られた点は喜ばしい。

### 〔縄文時代〕

全国的话题といえは長門町の鷹山遺跡である。黒曜石原産地遺跡群の中にあり、縄文後期の採掘坑が調査され、付近一帯の状況が本格的に明らかにされた点は重要であろう。ところが程なく対照的な位置にある下諏訪町東俣地区でも同類の遺跡が確認された。本州最大の黒曜石原産地をひかえ、数年来地道な分布調査を継続してきた関係各機関の努力がようやく実ってきたといえよう。今後への期待も益々大きくなった。

集落址調査は相変わらず多い。草創期では隆線土器が多数集中した信濃町担当分の東裏遺跡、2ヶ年に及んだ木曾上松町お宮の森裏遺跡では、表裏縄文土器期の7軒なる馬蹄形集落が縄文最古期例として周辺各地からの見学者を集めた。また古い例では塩尻市矢口遺跡で、在地・東海両系の良好な早期末土器を伴う17軒の住居地がほぼ環状になって完掘されるなど、縄文集落研究に貴重な成果をあげた。

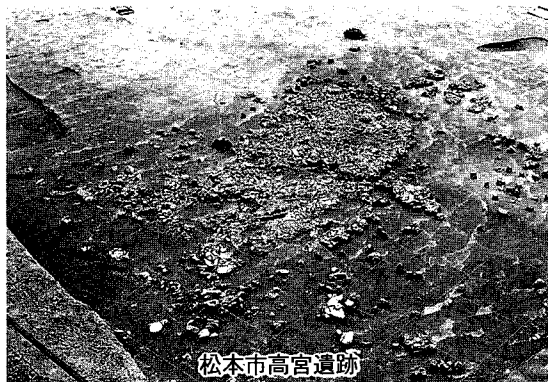
一方、縄文時代研究ではやや遅れをとっていた北信地方でも大きなニュースが話題となった。更埴市屋代遺跡群では縄文後・晩期までは散在的の包含層は確認されていたが、更にその下層、水田面からは5~6mで敷石住居・掘立柱建物を伴う50軒以上の本格的な中期後葉の集落が検出されたことである。現在最下層は中期初頭期に及んでいる。県下では最深部からの集落址



であり、今後沖積地における埋没遺跡のあり方に絶好のデータを与えたといえよう。遺物では埋甕や多数の獣骨が加曾利Ⅱ式主体の土器に在地系の圧痕隆帯文、大木式系などに伴出している。獣骨の特異な出土もされることながら、本県であまり注目されなかった大木式系土器の出土は、新たな“土器論”が展開されそうである。

その他では、壺をかかえた高さ10cmの完形土偶が柱穴から出土した岡谷市目切遺跡は、特殊な祭祀遺構も伴う。茅野市勝山遺跡は中～後期の80数軒の集落址だが、同じ市内の立石遺跡では中期後半から後期が主体で、様々の形態・内容をもつ方形柱列11棟が35軒の住居址中にあり、土壌墓から硬玉製垂飾品が3点検出されている。ハヶ岳西南麓で遺跡が急減するというこの期に、方形柱列を含む集落址が調査され、その内容もそれ以前の最盛期とあまり変化しない点など、あらためて遺跡急減期の様相にスポットを与える必要があろう。

遺跡が極端に減少する晩期で特に注目を浴びたのが飯田市中村中元遺跡である。遮光器土偶の出土ではじまった調査は、この期特有の“第二の道具”が多出し中でも滑車型を含む約700点の耳飾は圧感である。県内では最高だし、古くから著名な群馬県千網谷戸(重文)、近時「耳飾館」を開館した茅野両遺跡にも匹敵する内容である。他の土器を含む大量の出土品の整理



結果が楽しみである。以下は簡単に触れてみたい。

大野市大行原一草創期然文系土器、小海町中原一前期環状集落と大型耳飾、小諸市郷土一石棒を伴う炉址と径80cm、容量90ℓを測る大型鉢やこれをこれをかこむ6箇の伏甕など屋内祭祀の好例。高森町深山田・大宿、阿南町ねぶぎ一晩期条痕文系の合せ口甕棺など土器棺墓。丸子町測ノ上一敷石住居の好例など。

最後に「縄文早期研究会」に触れたい。他部会に遅れをとったが、押型文文化の中心的地域という点をベースに発足し、月1回程度の研究会一文献解題、研究発

表、現物を見ながらの討議、現場見学など会場を移動しながら実施している。近県からの参加者もあり、今後の成果が期待される。

#### 〔弥生時代〕

他時期に比べ調査例は少ない。岡谷市庄の畑遺跡の入れ墨ある土偶、本誌前号で略法した長野市篠ノ井遺跡群の後期円形周溝墓19基の密集検出などが注目された。集落遺跡としては中期の高森町小原、終末期から古墳時代初頭にかけての軽井沢町県遺跡などがある。

#### 〔古墳時代〕

まず第一は本誌巻頭の長野市和田東山3号

墳であろう。松本市弘法山古墳以来の未掘の前方後円墳という点で後述の如き波紋も呼んだ。

古墳調査は特異なニュースが報じられている。上田市陣馬塚古墳の銀象嵌ある直刀、牟礼村甲申塚のたたき目ある埴輪、坂城町東平古墳の漆塗堅櫛、高森町北林五号墳周溝からの殉葬馬、同じ周溝から埋葬施設が確認された積石塚の松本市針塚古墳などがある。

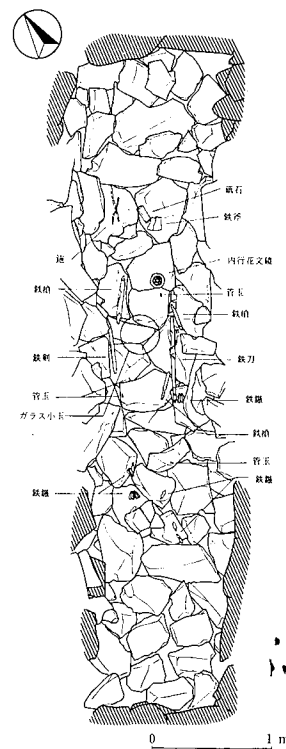
遺跡としては、初頭の北陸・東海・在地系各土器の良好なセットを出土した中野市牛出遺跡のほか、特記すべきは松本市高宮遺跡の「水辺祭祀場」であろう。相当広範囲に高杯・勾玉など祭祀用具をセットした遺構が展開しており、全国的にも貴重な例といえよう。

なお、先の和田東山古墳発掘調査に関連し、県考古学が主催した「科野の古墳出現期を考える」フォーラムが9月18・19日の両日開かれた。小林三郎、石野博信・岩崎卓也・大塚初重各氏を招き、地元からの基調報告を加えて活発な議論が展開されたが、多くの参加者に多大の反響を呼んだ点も付記したい。

#### 〔奈良・平安時代〕

この時期の調査が一番多い。集落遺跡関係ではオリソピック関連の長野市南宮遺跡がある。初年度だけでも大型住居を含む約350軒の住居地や、八稜鏡・石帯

〈次頁下段へ〉



## 県内埋文関係機関紹介

## 小さな夢から大きな夢へ

## 長門町原始・古代ロマン体験館

## 体験館という小さな博物館

長門町の「原始・古代ロマン体験館」は開館してから今年の夏でちょうど2年の歳月を経ようとしています。その名称からどんな施設かという質問もよくされましたが、基本的には博物館相当施設としての機能を果たし、その特徴としては縄文土器や石器・骨角器づくりなどの体験学習の実践を運営事業の主体とした施設として開設されました。

建物は使われなくなった小学校の古い体育館を改修し、手作りの展示を主体とした小さな施設ですが、開館日全日を通していつ誰が来ても気軽に体験学習に参加出来るという体制が喜ばれ、不便なところですが口コミで年間4,000名を超える来館者が訪れるようになってきました。

この体験学習主導型の博物館の企画は、博物館の建設構想の後に組み込まれたものではなく、町内のごく小さな発掘調査の資料整理がきっかけとなって、自発的に起こった公民館活動の一つから発展したものです。つまり展示してある資料の活用の実践が前提にあって、それなら恒常的にそれらを活用する施設があれば、もっと沢山の人が文化財を楽しむという感覚で身近なものとして理解してもらえるのではという発想に基づくものでした。体験館という博物館の名称はそこから来ています。

## 一緒に遊び、考える

体験館事業のもう一つの大きな特色は、来館者と迎

える側の職員が必ずコミュニケーションをとるといふところにもあります。つまり、いつ誰が来ても必ず体験に際して職員が一人一人にその方法やコツを実際に説明し、一緒に相談にのりながら進めていくという体制をとっています。また、この体験学習の指導は、町内の一般の方を指導職員としてお願いしてあります。指導職員としての仕事の内容は、体験館内の復原家屋をはじめとした展示づくりから、縄文土器の施文に使う原体や石器づくり用の黒耀石の剝片、弓、骨に穴を開ける黒耀石のドリルなどの体験資材の準備、そしてそれらを用いた指導にいたるまで多岐に及んでいますが、幅広い年齢層の職員がそれぞれの特技や生活上の経験を活かしてその仕事にあたっています。考古学の専門分野に特別深い関わりがあったという方はむしろ少ないわけですが、指導員自身が勉強し、工夫を重ねていく過程で、学説や理論先行型の指導ではなく、参加者側と同じ目の高さから、生活上の知恵を共有して一緒に遊び、一緒に考えるという形が生まれ、訪れる人にも親しみ易さとして受け入れて頂いているようです。



体験学習する子供たち

## &lt;前頁よりつづく&gt;

など多数の遺構・遺物が検出され、郷名などと対比できる善光寺平有数の遺跡といえる。本誌前号でも報じた小諸市宮ノ反遺跡では住居址・建物址など約200軒発掘されたが、中でも一辺60mに方形区画された内側に3×6間の掘立柱建物二棟を中心に建物が計画的に配置された整然とした「居館址」（古墳末～奈良）は県下では初めてであり、鋳物師屋遺跡群など周辺一帯に展開する個別の遺跡群を包括した総合的な検討が今後の課題となろう。

その他平安時代の精錬鍛冶の工房址検出の坂城町小山製鉄址、同時代の私印（王強私印）出土の更埴市更埴条里遺跡、荘園名が奈良時代まで遡ることを証明した「市寸（市村）」の墨書土器を伴った長野市芹田東沖遺跡、同じく「神司」墨書土器が岡谷市榎垣外遺跡、刻書された須恵器を出土した中野市牛出古窯址など文字



小諸市宮ノ反A遺跡

資料の発見が続いた。なお地域的・时期的には珍しい青銅製品を伴った大規模な集落址が調査された富士見町小森遺跡も注目されるであろう。

## 〔中・近世〕

近年この時代への考古的調査も進展しており喜ばし

### 3. エコミュージアム構想の中での位置付け

体験館の発足の原点としては、文化財の価値がその希少性の優劣によって問われるものではなく、現在に生きている人と人との関わり方によって、様々な活用の方向性や価値観を生むものであるという考え方に基づいて出発したものでした。そして、その将来には、町全体の歴史的環境を構成する多くの文化財を繋いで、点と点の活用からいくつもの線で結ばれる文化財の保存と活用のネットワークをつくることに大きな目標があります。

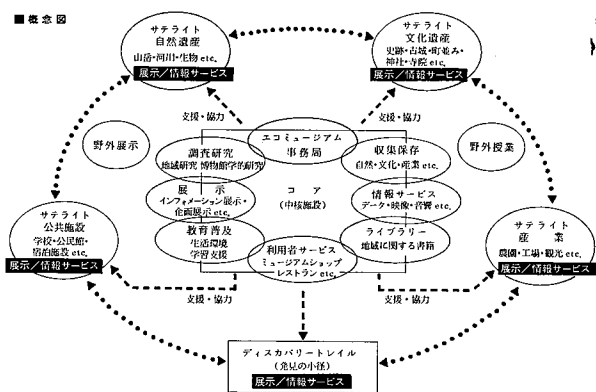
このネットワーク化には、体験館の地域社会での存在意義や人材の育成と組織体制のあり方を明確にしていけることが不可欠となりますが、その基本理念としては、最近まちづくりや生涯学習の中で注目されつつあるエコミュージアムの概念と大きく共通するものがあります。このエコミュージアムは、地域社会の人々の生活と、そこの自然、文化遺産などを現地において保存し、育成し、展示することを通してその地域社会の発展に寄与することを目的とする新しい理念の総合野外博物館と定義される考え方ですが、右図に示したその構成要素からすると、体験館は一つのサテライトとしての役割を担っています。こまかな定義と内容については別の機会に触れたいと思いますが、体験館の大きな課題はこのサテライトとしての意義をより発展させるために、地域の社会的な動向にどのような貢献をしていくべきか、博物館としての運営を専門分野の枠から一步拡大した視点で捉えなおし進めていくというところにあります。

#### エコミュージアムとは

エコミュージアムという言葉は、エコロジー

(生態学)とミュージアム(博物館)から造られました。環境の中の人間をとらえた博物館であり、「生活・環境博物館」と意識されています。

このエコミュージアムの設置の目的は、地域の自然、文化、歴史の遺産を通じて過去から現在にかけての生活環境を理解し、地域の未来を創造していくことにあります。遺産とは、地域の産業や伝統的な建築物、天然記念物や動植物、伝説や習慣に至るまで広い概念で考えられるものです。そして、その特徴は、それぞれの遺産が一つの施設に集約される形ではなく、それらが在るべき地域の空間に分散した資源として活かされ、言いかえれば町や地域が「まるごと博物館」として捉えられるところにあります。具体的なエコミュージアムの全体像は、中核施設となるコアミュージアムと地域に分散したサテライトミュージアム、そして歴史や自然を観察できるディスカバリートレイルで構成されています。



エコ・ミュージアム概念図



い風潮といえよう。

中世では特徴的な竪穴状の住居址や石積みが調査された東部町山ノ越遺跡、焼失した中世建物址の建築物材の一部が検出された岡谷市堰垣外遺跡、金峯山信仰にかかわる銅鏡等が出土した川上村金峯山大鳥居跡遺

跡、時期が確定できないが祭祀遺物出土で有名な「鳴石」の周辺から石積みが確認された立科町雨境峠祭祀遺跡がある。

近世では古文書が現存する江戸末の登り窯が、工房址などを伴って二基はほぼ完掘され、その保存も検討されている塩尻市洗馬焼窯址は類例が少ないだけに貴重である。一方、現地踏査により江戸末の西洋式高炉の可能性が指摘されている佐久町茂来山たたら遺跡、復元整備のための上田城本丸跡、長野市松代城跡がある。

注 県内の主要な調査成果や論文・報告書などについての詳細は「信濃」46巻6号にある。

編集後記：本誌も前号からカラー化したため、年4回刊行が2回となった。加えて送料値上のダブルパンチ。モットーであるより早い情報伝達の意味あいも薄れてきている。県立歴史館も含めて本誌のあり方を再検討する必要がある。御意見を寄せいただければと思います。



県内埋文グループ紹介

# “古代の技術になんでも挑戦してみよう”

はじ  
岡谷市 土師の会

## ——土器復原ボランティアの活動——

昭和58年1月、公民館の成人学校「古代の技術をまなぶ」講座の受講者が終了後も活動を続けるために、このグループは結成されました。講座は、はじめから市内の遺跡から発掘された土器の復原をボランティア活動で行うことを目的に開設された異例の、公民館活動としては初めての試みでしたが、定員15人を上回る26人の市民が参集しました。

土器の復原作業は整理作業のなかでは最も楽しい仕事です。形の壊れたものを再びよみがえらせ、多くの人に見てもらえて、文化財として永久保存されるのです。こんな素晴らしいことを職員だけが独占することはない、やりたい人に技術を覚えてもらって、どんどんやっていただこうということからスタートしたのです。もちろん批判は覚悟のことでした。しかし専門家でも最



土器の野焼き風景



古代人に扮じて(加曾利貝塚にて)

## ——原始、古代人に

## なってみよう——

さて、この会のもう一つの目的は、古代の技術を学ぶということでした。これまでに、土器作り(縄文、はにわ、陶器)と野焼き、ドングリ料理、有孔罎付土器の太鼓と酒作りをとおして、古代の人々の生活を体験的に学習してきました。特にドングリ料理は、イノシシの肉入りミートボール、木の実のクッキーはこれがドングリとは信じてもら

えないほどに上手にできるようになり、他市の公民館活動に講師としてよばれるほどになっています。

活動は毎週金曜日、要請に応じて集中復原作業も行っています。「原始古代の息吹が土器を通して実感として伝わってくる、それが楽しくて」と身体障害のこどもの世話の合間に駆け付けるお母あさんもいます(入会して1年目)。会員の構成は、実に様々で保育所園長、元鋳物型作士、詩吟の先生、陶芸家、会社員、主婦兼母、そしてたまたま転勤で岡谷に住んで縄文土器の復原技術を習得し、今は故郷に帰った人も。

昨年の秋、加曾利貝塚縄文土器作りの会と旧交を温めました。土器作りや縄文食に関しては大先輩です。このときアングンの衣服にたく刺激された会員が、編み台を早速に作りました。この調子ですから28才から80才の仲間はまだまだ意欲十分です。

現在20名の会員が、壺を抱えた妊婦土偶の出土した、あの目切遺跡の200個体の土器復原を控えて、新たな意欲を燃やしています。



美味しかった縄文食

初は素人です。技術を習得してもらえば良いわけです。趣味を生かして、楽しみながら、学習成果を社会に役立てることができるという生涯学習活動をめざしています。

59・60年度、梨久保遺跡の100個体の土器を完形復原。次に花上寺遺跡の縄文土器120点、そして毎年の出土品のはほとんどが復原され、出土品公開展示を飾っています。